

# 草庵仏教

第162号  
(発行日)  
2003年12月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)  
63-4488  
(発行人) 土井紀明  
メール：kimyou4@yahoo.co.jp  
http://www.eonet.ne.jp/~souan

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月22日午後2時  
.....
- 〈念仏座談会〉  
第1土曜日午後3時  
第3土曜日午後3時  
\* 8月の〈同朋の会〉及び  
第3土曜日の念仏会は休み。

## 自力の心を離れる道

(法蔵館版・真宗聖典)

V 「どうしたら真宗で救われるのでしょうか」  
D 「ああしたら必ず救われる、こうしたら必ず救われるというように、因をなせば必ず果を得るようには教えられていません。むしろそういう企ては功利的な自我のはからいだともいえません。自動販売機に百円投入すると缶ジュースが出てくるように、これをすれば必ず救われるというようなものではないですね」

V 「じゃあ、救われるかどうか分からないけれど、とりあえず聞法を続けていくだけなのですね」  
D 「いいえ、そうは思いません。救いへと導かれていく確かな道というのがあると思います」

V 「それはどんな道ですか」  
D 「愚かな私が探求した話ではなくて、親鸞聖人ご自身が勧め下さる道、その道に随っていくのが正道でありましょう」

V 「聖人のお勧めの道とはどのような道ですか」  
D 「(教行信証)のお言葉に横超とは、本願を憶念して自力の心を離るる、専修といふはただ仏名を称念して自力の心をはなるる、これを横超他力と名づくるなり」

V 「真宗の聞法をすることと本願を憶うこととの関係は？」  
D 「真宗の聞法は、阿弥陀仏の本願を聞かせて頂くことであり、それが本願を憶念することです。聖人の信巻のお言葉に衆生、仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなし。これを聞と曰うなり。」

とあります。真宗のお助けを横超といい、それは自力の心を離れて本願他力に帰すことです。それには二つのことが大事であると聖人みずからここで示されています。すなわち本願を憶念することと仏名を専修することだ」と

V 「本願を憶念するとは」  
D 「念仏往生の本願の思し召しを常に我が身に引き当てて憶うことです」

V 「真宗の聞法をすることと本願を憶うこととの関係は？」  
D 「真宗の聞法は、阿弥陀仏の本願を聞かせて頂くことであり、それが本願を憶念することです。聖人の信巻のお言葉に衆生、仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなし。これを聞と曰うなり。」

とありますように、聞法というのは外のことを聞くのではなく、阿弥陀仏が何のために本願を起こし、どのようにして本願を実現されたかという、仏願の起こりと結果を聞くのです。それが(お念仏のいわれ)です。それを聞くことが聞法の基本です」

V 「本願の思し召しを聞くこととはお念仏のいわれを聞くことなのですね。お念仏を申しつつ、

実生活の中で、本願に心を寄せ続けることなのですね」  
D 「ええそうです。香樹院師のお言葉にも  
そもそもこの念仏は、何のために成就して、何のためにか称えさせたもうやと、心を砕きて思えば、常に称えるが常に聞くのなり」とあります。お念仏はどうしてできあがり、なぜ称えるのかといういわれ、すなわち念仏往生の願の思し召しを心を砕いて思うことです。それが自力の心を離れる道だと聖人は仰せられるのだと思います」

V 「もう一つ自力を離れる道について聖人は、仏名を称念することといわれていますが、これはお念仏を申すことですよ」  
D 「ええそうです。お念仏を専ら称えることです」

V 「そうすると裏から言うと、真宗の教えに触れていても、ろくろく念仏往生の願のいわれを聞かず、ろくろくお念仏も申さないなら、自力の心を離れて本願他力を憑むことはなかなかできないということですね」  
D 「聖人の思し召しから何うとそうなるのではないのでしょうか」

V 「お念仏は信ずる前において自力を離れる道でもあるのですね」  
D 「ええ聖人は諸処にそう仰せ

られています。たとえば(浄土文類聚鈔)には  
万行円備の嘉号は障を消し疑いを除く。末代の教行、専らこれを修すべし。」

とあって、(仏さまのあらゆる善き行が完全円満に備わっているところの南無阿弥陀仏の名号は、浄土往生へのさまざまな障害を消してください、また本願を疑う心を除いて下さるから、末世の者は専らこれを修しなさい)と仰せられるのです。本願を疑惑するのは疑心自力といって自力の心です。正像末和讃にも  
信心のひとにおとらじと  
疑心自力の行者も  
如来大悲の恩をしり  
称名念仏はげむべし

といわれています。ここでも如来大悲の恩である選択本願(念仏往生の願)をよく知って、称名念仏を励みなさいといわれています。また浄土和讃には  
定散自力の称名は  
果遂のちかいに帰してこそ  
おしえざれども自然に  
真如の門に転入する

とあります。ここでは自力の心があっても称名し続けておれば、自然に阿弥陀仏の大悲のお計らいによって真実の世界に入れて下さるとの思し召しです。また高僧和讃には  
不退のくらすみやかに  
えんとおもわんひとはみな  
恭敬の心に執持して

## 弥陀の名号称すべし

とあります。これは、浄土に生まれることから退転しない位をすみやかに得ようと思う人はつねに本願を敬いつつ弥陀の名号を称えなさいとの仰せです。またお手紙にも

往生を不定におぼしめさんひとは、まずわが身の往生をおぼしめして、御念仏さうろうべし。

といわれ、まだ真実の信心がえられず往生が定まらない人は、我が身の往生のために御念仏申しなさいと勧められています」  
V「聖人はずいぶん御念仏申すこととお勧めになっているのですね。私は御念仏は信心を頂いた後に仏恩報謝として称えらばかり思っていました」

D「貴方のいうように御念仏は仏恩報謝の行でもあることを聖人は申されています。たとえば正信偈に

ただよく、常に如来の号を称して、大悲弘誓の恩を報ずべし、といえり

とあります。また正像末和讃には、信心を頂いた後は

## 弥陀大悲の誓願を

ふかく信ぜんひとみな

ねてもさめてもへだてなく

南無阿弥陀仏をとなくべし

とあります。またお弟子の性信

坊あてのお手紙には

わが身の往生、一定とおぼし

めさんひとは、仏の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために、御念仏、ここにいられてもうして、世のなか安穩なれ、仏法ひろまれと、おぼしめすべしとぞおぼえさうろう。

(乃至)

往生一定とおもいさだめられそうらいなば、仏の御恩をおぼしめさんには、ことごとくさうろうべからず。御念仏ころにいれてもうさせたまうべしとおぼえさうろう。

とあります。往生一定の信心の定まった人は仏恩の深きことを思つてよくよく御念仏申しなさいとお勧め下さっています」

V「そうすれば信前の称名念仏もあれば信後の念仏もあるのですね。私は信後の仏恩報謝の御念仏ばかりと思っていました」

D「そう教えられてきたのにはわけがあります。それは蓮如上人が仏恩報謝の念仏を非常に強調されたからです」

V「なぜ、蓮如上人は仏恩報謝の念仏を強調されたのですか」

D「蓮如上人の頃、信心のことはいわず「称えたら助かる、称えさえずればいい」という自力の念仏が盛んだったので、それに対して、「助けて下さい南無阿弥陀仏」は自力の念仏、「助けて下さって有難うございます」が

真宗のお念仏ということ、御念仏における自力を捨てさせよ

うと努力されたからです」

V「そうすると蓮如上人では、真宗のお念仏はいつの場合も「助けて下さって有難う」という仏恩報謝の念仏といわれるのですね。しかし、実際はお助けにあつていない場合があります、その場合も「助けて下さって有難う南無阿弥陀仏」とはなかなか思えないですね」

D「ええそうなんですが、そう

いう場合でも、蓮如上人は御念仏はみな報謝の念仏といわれるのです。なぜなら、たとえ信心が頂けてなくても御念仏は本来、仏恩報謝という意味をもっているということ、ただ信がまだ頂けていない人はそのことが自覚的になつていないだけのこと。まだ仏恩報謝の念仏の心が実感できないながら称えていても、御念仏そのものは「お助け下さって有難う」という意味をもっていることにはかわりがないのです。ただその意味が当の本人に本当に分かる時がいろいろとあるということ、お勧めと伺います」

\*

V「親鸞聖人の場合は、さきほど引用されたいくつかの文章から知られますのは、信前の称名をかなり強調しておられますね。それでもいいのですか。自力の御念仏に止まつてしまわないですか」

D「聖人は信前の称名を強調されると同時に弥陀の本願の思し

召しをよくよく聞くこと、憶念すること、強調しておられます。御念仏申すことに努力する人がし

まうのは、本願をよく聞くことと信心の肝要なことを痛感しないからだと思ひます」

V「信前の称名と信後の称名といわれますが、判然とわけていかねばならないですか」

\*

D「御念仏と信心の関係を説明するために一応信前信後をわけますが、実際の念仏聞法の生活は信前信後というようなことをいわなくても、とにかく本願を思うては称え、称えては本願のお心を使うということの相續がずっと一生続けばかりです。信前と信後といつて別の念仏生活があるのではありません。御念仏申しつつ本願を憶念する、この一本道がずっと浄土へと続いているのです」

V「信心はそういうプロセスの中で恵まれてくるものなのですか」

D「ええそうです。聖人の浄土和讃の一番最初に

弥陀の名号となえつつ

信心まことにうるひとは

憶念の心つねにして

仏恩報ずるおもいあり

とあります。弥陀の名号「称えつつ」ある生活において、時が

至つて信心まことに得るので、

そのとき仏のご恩の重さが実感

され仏恩報ずるおもいが自然に湧いてくるのです」

V「時が至るといふのは、念仏の行者に信心が起ることです」

D「ええそうです。それについて浄土和讃に

若不生者のちかいゆえ

信樂まことにときいたり

一念慶喜するひとは

往生かならずさだまりぬ

とあり、信心が時いたつて起るのは、若不生者の誓いゆえであるとのこと。若不生者不取正覺と誓われた大悲にひたつていくなかで、時が熟して大悲の心が人に届いて信心となるのです」  
V「わかりました。弥陀の名号を称えつつ日暮しをし、その中で本願の大悲を聞きつけていく、この一本道が自力を離れ本願他力に帰する道であり、浄土へと生まれゆく同じ一本道なのですか」  
D「そうお聞かせ頂いています」  
(了)

## 歎異鈔 第十四章第二講

この悲願ましまさずは、かかるあさましき罪人、いかでか生死を解脱すべきとおもいて、一生のあいだもうすところの念仏は、みなことごとく、如来大悲の恩を報じ徳を謝すとおもうべきなり。念仏もうさんごとくに、つみをほろぼさんと信ぜば、すでに、われとつみをけして、往生せんとはげむにてこそそうろうなれ。もししからば、一生のあいだ、おもいとおもうこと、みな生死のきずなにあらざることなければ、いのちつきんまで念仏退転せずして往生すべし。ただし業報かぎりあることなれば、いかなる不思議のことにもあい、また病悩苦痛せめて、正念に住せずしておわらん。念仏もうすことかたし。そのあいだのつみは、いかがして滅すべきや。つみきえざれば、往生はかなうべからざるか。

### (歎異鈔第十四章)

\*

現代語訳(もし、この大いなる慈悲の心からおこしてくださった本願がなかったなら、わたしどものようなあきれるほど罪深いものがどうして迷いの世界を離れることができるだろうかと考えて、一生のうちに称える念仏は、すべてみな如来の大いなる慈悲の心に対し、そのご恩に報い、そのお徳に感謝するものであると思わなければなりません。念仏するたびに自分の罪が消え去ると信じるのは、それこそ自分の力で罪を消し去って浄土に往生しようと努めることに他なりません。もしそうだとすれば、一生の間に心に思うことは、すべてみな

自分の迷いの世界につなぎとめるものでしかないのですから、命の尽きるまでおこたることなく念仏し続けて、はじめて浄土に往生できることとなります。ただし過去の世の行いの縁により、思い通りに生きられるものではないのですから、どのような思いがけない出来事にあうかもしれないし、また病気に悩まされ苦痛に責められて、心安らかになれないまま命を終えることもあるでしょう。そのときには念仏することができません。その間につくる罪はどのようなにして消し去ることができのでしょうか。罪は消え去らないのだから浄土に往生することはできないというのでしょうか)

\*

念仏に罪を消滅させる功德があるから、その功德を当てにして念仏を申して自分の罪を滅していく、そのことによつて浄土に往生しようというような念佛理解が当時あつて、それに対して唯円房は親鸞聖人のお伝え下さる本願念佛の思召しはそういう念佛ではないといわれるのです。

それでは浄土真宗のお念佛はどういう念佛であるかといえば阿弥陀仏の方からいえば、「汝の罪の一切は弥陀の願力で消滅させて汝を浄土に生まれさる」という仰せであり、私どもの方からいうと大悲の仰せを聞かせていただいて、「有難うございます。如来様なればこそ、ようこそ、ようこそ」と、阿弥陀仏のご恩を謝する念仏です。「助けて下さるとは有難い」という感謝のお念仏です。

ところが、異義を称える人たちのお念仏は、一生涯お念仏を称え続けて、自らの罪を残るところもなく滅して助かるうとする念仏ですから、異義者の念仏は要

するに「お助け下さい南無阿弥陀仏」であります。それに対して真宗のお念佛は「助けて下さる南無阿弥陀仏」であります。

「お助け下さい南無阿弥陀仏」と、人が請い願う念仏は、本当に阿弥陀様は私をお助け下さるのであるうか、という不安がつきまといまます。一方、(助けて下さる南無阿弥陀仏)の念仏は、阿弥陀仏に撰取されて捨てられないという安心と喜びのあるお念仏です。

\*

ではなぜ真宗のお念仏は「助けて下さることの有難さよ」という安心と喜びが伴うお念仏なのでしょう。

それは、「あさましき罪人」であり、迷いを離れることの出来ない愚悪の凡夫が、生死という迷いの境界を離れてさとの境界へ往くための行業は、阿弥陀仏の方ですべて修行して仕上げて下さったこと、その限らない慈悲のお心と力を、南無阿弥陀仏の名号に聞かせて頂くからです。「汝の往生は佛仕事よ、まかせよ」との大悲を南無阿弥陀仏と聞けばかりで阿弥陀仏の救いにあずかるからです。ここに安心と喜びが生まれるのです。

\*

念仏における滅罪の利益を当てにし「念仏もうさんごとくに、つみをほろぼさんと信じていくのは「われとつみをけして、往生せんとはげむにてこそそうろうなれ」で、自分で自分の罪を消して浄土に往生しようと励んでいるのです。生きていくことは念々罪を造ることでもありませんから、そのつど罪を消していかなければなりません。そうなる、「いのちつきんま」で念仏退転せずして往生すべし」で、念仏が退転しないように常に励んで称えて

いかなばなりません。それでは懈怠になりがちな凡夫には難しい道であります。ことに臨終まじかになると、肉体的にも精神的にも苦しい状態になりますから、そういう時に念佛がはたして称えられるかどうかという不安があります。このことをここでは「ただし業報かぎりあることなれば、いかなる不思議のことにもあい、また病悩苦痛せめて、正念に住せずしておわらん。念仏もうすことかたし。そのあいだのつみは、いかがして滅すべきや」といわれています。(業報かぎりある)とは、定まった前世の業の報があつてというところで、臨終まじかになつて過去の業報が現れて、「いかなる不思議のことにもあい」で、念佛も申しれないような不慮の事態がおきるかもしれない。災害やいくさや事故など、思いがけないことにあつて念仏するゆとりもなくいのちを終わるとか、「病悩苦痛せめて、正念に住せずしておわらん」というように、あまりにも病気の苦しみがひどくて安らかに念佛申すことなく死ぬようなことになると、「そのあいだのつみは、いかがして滅すべきや」で、病苦などで念佛が申されず、あるいは平静な心で阿弥陀仏を思い浄土をひたすら願うような(正念)に住せずに死ぬようなことになれば、その間の罪が残ってしまう。

そうなる、「つみきえざれば、往生はかなうべからざるか」で、罪が残つてしまつて往生はできないことになるがいかであるうかと、異義者たちに唯円房は問題提起しているのです。

このように念佛を称えて自分の罪をそのつど消していこうとするのは聖人の仰せにはないことだといわれるのです。

## 〈住職つれづれ雑感〉

\*十一月十一日。印度山日本寺二十五周年の祝賀会に出席。当時、駐在員だった日下師と浅井師、それに日本寺に滞在していた大工原師に会う。インドでわかれて以来初めて会う。宴会のテーブルの隣りに田中成明師がいて話が弾んだ。師はニューヨークに曼荼羅寺を建て、また欧州のクロアチアにも真言密教の道場を運営していて、日本と欧米を行ったり来たりして仏教を宣布している。会員は万を超しているそうだからたいした活動をされている。アメリカなどはもう開教の時代は過ぎて、今やアメリカ人の僧侶がアメリカ人を教化する時代だそうである。インド現地の日本寺は仏教活動よりも福祉活動ことに医療や児童教育に力を入れている。仏教の修行・研修の場にもっと活用してほしいものである。

### 平成16年度御年忌年回表

1周忌	平成15年亡
3回忌	平成14年亡
7回忌	平成10年亡
13回忌	平成4年亡
17回忌	昭和63年亡
25回忌	昭和55年亡
33回忌	昭和47年亡
50回忌	昭和30年亡
(25回忌をせずに23回忌と27回忌とする場合があります。また50回忌後は50年ごとになります)	